



写真-1 高砂大橋から堀川上流部を撮影（平成29年11月）

■ 加古川舟運と海運の中継基地として繁栄

上の写真-1 は、高砂大橋から堀川（旧高砂川）を撮影したもので、左手に見える社叢林（しゃそうりん）は高砂神社です。ここは、高砂市高砂町の堀川地区、かつて加古川舟運と瀬戸内航路の中継拠点として繁栄した港町で、この堀川は法定河川ではなく全域が港湾区域となっています。

慶長 10（1605）年姫路藩主・池田輝政^{※1} が、姫路城の支城として高砂城を築くとともに年貢米輸送の中継拠点として高砂港を築造、この時から都市としての高砂の歴史が始まります。

慶長 18（1613）年輝政が死去、跡を継いだ嫡子・利隆も元和 2（1616）年病死したため、元和 3（1617）年池田氏に替わり桑名藩主だった本多忠政が姫路に移封されます。

高砂城は一国一城令（慶長20年に幕府が制定した法令）により破却^{※2}され、本丸跡地に元々あった高砂神社が戻されます。そして、その周辺地区の町割りが行われ、そこに町屋が建てられます。ここに高砂は城下町から港町へと生まれ変わり、姫路藩の外港として繁栄することになります。

今回は、物流が町の盛衰に大きく関わった高砂の堀川について調べてみました。

※1 池田輝政：永禄 7（1565）年 12 月 29 日織田信長の重臣・池田恒興（つねおき）の次男として尾張国清洲（現・愛知県清須市）に生まれる。関ヶ原の戦功により慶長 5（1600）年 10 月姫路 52 万石に加増移封され、初代姫路藩主となる。慶長 6（1601）年から慶長 14（1609）年にかけて姫路城を大改築、慶長 11（1606）年からは加古川流域の改修も始め、加古川上流の田高川の開発や河口に位置する高砂の都市開発を行った。慶長 17（1612）年、正三位参議、および松平姓を許され「播磨宰相」「姫路宰相」などと称された。次男・忠継の備前国岡山藩 28 万石、三男・忠雄の淡路国洲本藩 6 万石、弟・長吉の因幡国鳥取藩 6 万石を合わせ、一族で計 92 万石（一説に検地して 100 万石）もの大領を有した。慶長 18（1613）年 1 月 25 日に姫路にて急死。

※2 高砂城破却：高砂城の廃材は、元和 4（1618）年小笠原忠貞（ただざね）によって築かれた現・明石城の資材に再利用されたとか。

■ 瀬戸内航路の寄港地だった高砂泊

西堀川沿いに十輪寺があります(写真-2)。寺伝によると、浄土宗の開祖・法然上人が、建永2(1207)年3月讃岐に配流される途中、高砂泊(たかさごのとまり)の老漁師夫婦らの求めに応じて上陸し、地元の漁師らに説法したことから、法然の弟子が法然を中興第一祖として、真言宗の寺院であった十輪寺を再興して浄土宗の寺院になったとあります。

また、高倉上皇が治承4(1180)年、安芸の厳島神社参詣のため西下する途中、高砂泊に到着した時の様子が、「高倉院厳島御幸の記」に以下のように記されています。(訳文)

「高砂の湊に着いたが、御乗船は船底が深く接岸できないと言うのは、大人数を乗せるための大型船だからであろう。小舟3艘を横に繋ぎ合わせて、上に横板を渡して御輿(みこし)を据えて上皇を上陸させたのだが、この時は上達部(かんだちめ)が運んだようだ。」湊が浅瀬であったため、端船(はしぶね)に輿を乗せて上陸した様子が描かれています。

このように、平安末期には、すでに高砂泊は瀬戸内航路の寄港地として知られていたようです。

なお、この高砂泊は、尾上・高砂の間にある今洲(今津)の浦口にあったもので、中世末期には加古川の流れが変わったために、泊地としての機能を失っていきます。



写真-2 十輪寺本堂

■ 池田輝政が進めた高砂城築城と港町づくり

文禄3(1594)年、東播磨の豊臣領を管理していた郡代・生駒玄蕃(いこまげんぱ)が、滝野の大庄屋・阿江与助らに命じて滝野から洗川尻(今市湊)までの舟運を開きます。

時は移り、慶長5(1600)年に姫路藩主となった池田輝政は、慶長6(1601)年から本格的な領国経営に乗り出します。前述のように加古川の流れ路変遷に伴い高砂が泊地としての機能を失いつつあったことから、高砂郡代・中村主殿助正勝に命じて、従来洗川(西加古川)に注いでいた加古川の本流を上部(現・加古川市平荘町里字上部)で堰き止めて東加古川へ流し、その河口部に新高砂港を建設します。尾上付近の住民には、諸役免除の特典を与えて高砂の開発に当たさせます。

『高砂市史』によると、輝政は慶長10(1605)年から、堀川の流路に直交した南堀川・北堀川を開削し、堀川および南堀川には石垣を積んで船着場を設けるなど港湾機能を整備します。さらに、北堀川の西方に開削を延長し、直角に折れて南下し海に注ぐ西堀川を開削※3、その結果、堀川、北堀川、西堀川と海に囲まれた区画が誕生します。(これらの堀川を総称して「高砂堀川」という)：図-1 参照)

その中にあった高砂神社を西堀川の北西、後の農人町に移し、その跡地に高砂城を築きます。そして、年貢米輸送の中継施設とするため、堀川沿いに米蔵「百間蔵」を建てます。このようにして高砂は、東加古川の河口港として、また姫路藩の外港としてその重要性を高めていきました。



図-1 播州高砂図

※3 高砂堀川の開削：輝政が高砂堀川を開削したことを示す史料として、後世の記述ではあるが天明8（1788）年作成の「慶長六年以降伝聞等記録綴」がある。世の中がまだ不安定な時期であり、高砂城の防御線構築を主目的として行ったのではないか。

■ 本多忠政 今日の高砂市街地の原形をつくる

時は流れて元和3（1617）年7月、姫路藩主となった本多忠政※4は、高砂城破却後の高砂の町を、港湾都市として再整備します。寛永3（1626）年に高砂神社が元の地に戻り、家臣団の集住地であった高砂城周辺地は町割りが行われ、そこに堀の北側、西側に住んでいた住民が移ってきます。さらに、加古川左岸にあった今津の住民も移り住みます。

高砂堀川で区画された碁盤目状の整然とした町は、今日の高砂町の原形になっています。堀川、南堀川に沿う東浜・南浜・材木・今津の各町には船着場や荷揚場、問屋の蔵があり、港町高砂の中枢機能を担っていました。

このように高砂は、領主の積極的な港町づくりによって加古川舟運と瀬戸内航路の中継拠点として急速に発展し、「元和・寛永の頃、最大に繁昌せしなり。（中略）大小軒を連ねて四千余屋、売買の道広く、川より海より運び来る貨物、日に万船を交易す。」といわれるようになりました。『播磨名所巡覧図会』には、「諸国の通商大場（広い場所という意味か）の湊と成りて、大廈（豪壮な建物）つらなり、上に川あり、下に海あり、萬船の出入に便よくて速く交易す。元より本邦出群の名所なれば、名にしおふ風流の名家多し」と記されています。



図-2 『播磨名所巡覧図会』十輪寺

図-2の絵は十輪寺を描いたものですが、寺の前にあった西堀川は、ほとんど「池」状態で蓮が群生し、そのことから「蓮池」と呼ばれていたようです。

図-3は、明治31（1898）年頃の加古川下流部です。土砂の堆積により広大な中州が形成されています。加古川本川から堀川への入口は銚子口と呼ばれていて、幅4間（≒7.3m）程の水路を高瀬舟が往来していたそうです。

また、高砂町南部の海は、新田開発のためにかなり埋め立てられています。北堀川および西堀川（蓮池）はまだ埋め立てられていません。

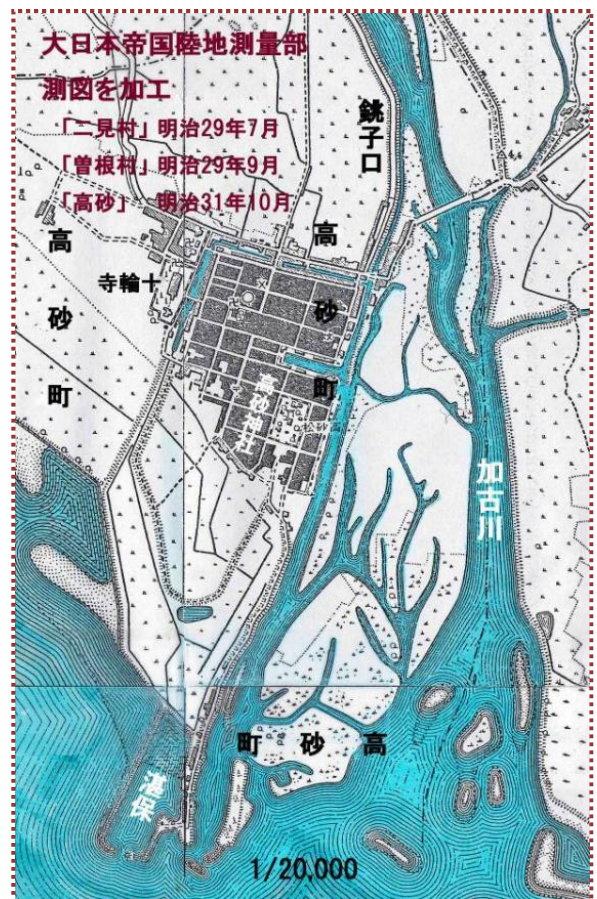


図-3 明治期の加古川河口付近の状況

なお、『高砂雑誌』によると、江戸後期の南堀川は、東西89間（≒162m）、幅28間半（≒52m）、北堀川は、東西137間（≒249m）、南北12間（≒22m）～15間（≒27m）、西堀川（蓮池）は、東西12間～18間（≒33m）、南北90間（≒164m）、北堀川の西に伸びる西堀川は、東西94間（≒171m）、南北10間（≒18m）～14間半（≒26m）だったそうです。

※4 本多忠政：天正3（1575）年、徳川四天王のひとり・本多忠勝の長男として生まれる。天正18（1590）年の小田原征伐に初陣し、武蔵岩槻城攻めで功を立てる。関ヶ原の戦いでは徳川秀忠軍に属して中山道を進み、第二次上田合戦にも従軍。慶長14（1609）年6月父が隠居したため、家督を相続して桑名藩の第2代藩主となる。大坂冬の陣（慶長19年10月11日）では徳川軍の先鋒を命じられ、休戦和議締結後には大坂城の堀の埋め立て奉行を担当している。寛永16（1631）年8月10日に姫路で死去、享年57。

■ 今も残る往時の高砂の町並み

堀川沿いには姫路藩の米蔵「百間蔵」や「三草蔵」、「土井蔵」など領主の名を冠した数十棟の蔵が立ち並び、東播磨の幕領・私領の年貢米・商人米が高瀬舟によって集積されます。これらの米は港で船に積み込まれ、大坂・江戸へと運ばれました。明治時代頃までよくいわれた言葉に「問屋の庭はきをしても食える」というのがあります。持ち運び俵からこぼれ落ちる米をはき集めるだけでも商売になるという意味で、堀川を中心とする高砂の町の繁栄ぶりをよく表しています。今でも高砂の町を歩いていると往時の繁栄ぶりを偲ぶことができます。

① 北堀運河に架かっていた稲荷橋

図-1 の地図には、百間蔵の南に、北堀川に架かる稲荷橋が描かれています。右の写真-3 がその稲荷橋で、橋長約 3.0m、幅員約 3.3m、竜山（たつやま）石製の石橋です。

今、北堀川は埋め立てられています。江戸時代、積み荷を降ろした高瀬舟がこの稲荷橋を潜って北堀川の船溜まりに接岸したそうで、「高瀬町」という町名の由来となっています。

このように、稲荷橋の親柱や高欄は残っていますが、果たして舗装をめくると桁が姿を現すのでしょうか。



写真-3 稲荷橋

② 工楽松右衛門（くらくまづえもん）旧宅

寛保 3（1743）年高砂町東宮に生まれた初代・工楽松右衛門は、わが国の帆布製造の始祖として知られ、従来のムシロ帆に替えて帆布に改良を加え、厚地大幅物の帆布の織り上げに成功、「松右衛門帆」と呼ばれて全国の帆船に用いられるようになりました。また、幕府の命を受けて千島の択捉（えとろふ）島に埠頭を築くなど優れた築港技術者として活躍しました。彼の功績を称え、高砂神社の境内に銅像が建てられています。

今津町にある工楽松右衛門旧宅は、大きな屋敷に大きな主屋、土蔵を構えていて、妻壁に高瀬舟の舟板を使用しています（写真-5・6）。主屋は寄棟造りの本瓦葺という商家の主屋には珍しい建て方です。平成 28 年から平成 29 年にかけて、高砂市により保存修理が行われました。写真-5 と 6 は、修理前と修理後の写真です。



写真-4 工楽松右衛門の銅像

この辺りは、細い路地、本瓦葺の屋根、中二階で漆喰塗り込めの虫籠窓、格子、出格子といった高砂の伝統的な商家、民家の建物が連なっていて、江戸から明治期にかけての町並みが残されています。



写真-5 舟板を使用した妻壁（工楽松右衛門旧宅・平成 26 年 5 月）



写真-6 改築後の工楽松右衛門旧宅（令和元年 6 月）

下記は、松右衛門が残した有名な言葉です。

「人として天下の益ならん事を計らず、碌碌（ろくろく）として一生を過ごす人は禽獣（きんじゅう）にも劣るべし」（人として天下に役立つことを考えもせず、一生を過ごすのは鳥やけものに劣る）という意味だそうです。



写真-7 保存修理後の工樂松右衛門旧宅



写真-8 左の建物を裏庭から撮影

③ 百間蔵跡

池田輝政が伏見にあった蔵をここ堀川沿いに移し米蔵として改築したといわれ、北御蔵 52 間、南御蔵 48 間、2 棟合わせて「百間蔵」と呼ばれていました。今、その跡地には三菱製紙高砂工場のレンガ造りの建物が建ち、蔵跡を示す石柱が道路脇に立っています。



写真-9 堀川に架かる永楽橋東詰から三菱製紙高砂工場を望む



写真-10 「旧姫路藩酒井侯御米百間蔵址」と刻まれた石柱

■ モノローグ

加古川舟運と瀬戸内航路の中継拠点として発展してきた高砂の町ですが、明治になって鉄道が整備されてくると、物流の中心は舟運・海運から鉄道へとシフトしていきます。

山陽鉄道（現・JR 山陽本線）は、当初高砂町を通る海沿いのルートを予定していましたが、高砂町が反対したことで加古川町（現・加古川市）を通るルートに変更、その結果、東播磨地域の物資の集散が加古川町に移り、大正 2（1913）年の播州鉄道（現・JR 加古川線）開通により加古川の舟運を支えた高瀬舟も次々と姿を消していきました。

時代の流れに抗うことで結果的に町の発展の芽を摘んでしまうことに…。

モミジアオイ（紅葉葵）

アオイ科フヨウ属の宿根草で北米原産。別名は紅蜀葵（こうしゅき）。和名の「モミジアオイ」は、葉がモミジのような形であることから。背丈は 1.5～2m くらいで、ハイビスカスのような花を夏に咲かせる。そのためか、学名は *Hibiscus coccineus*。茎はほぼ直立する。触ると白い粉が付き、木のように硬い。同じ科のフヨウに似るが、花卉が離れているところがフヨウと違うところ。花の径は 15cm～20cm で色は鮮やかな緋色。開花時期は 7 月～9 月。



写真-11 旧花井家近くの民家前に咲いていたモミジアオイ

【参考資料】

- 1 『高砂市史・第二巻 通史編 近世』 高砂市 平成 22 年 6 月
- 2 『高砂市史・第五巻 史料編 近世』 高砂市 平成 17 年 5 月
- 3 『高砂雑誌』 高砂市市長公室 市史編纂準備室 平成 9 年 10 月
- 4 『近世の高砂』 山本徹也著 高砂市教育委員会 昭和 46 年 10 月
- 5 『播磨名所巡覧図会』 秦(村上) 石田編 中井藍江画 文化元年
- 6 『池田輝政、本多忠政、モミジアオイ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 29 (2017) 年 9 月 『ひょうご水百景』 No.76

改訂：令和 8 (2026) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.76